

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04532

研究課題名（和文）ベルリンの就学前施設における道德教育改革の今日的動向に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study on Current Trend of Moral Education Reform in Preschool Facilities in Berlin

研究代表者

吉田 武男（YOSHIDA, TAKEO）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40247945

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ベルリンの幼児全日施設における道德教育改革の今日的動向の特質について、改訂版の「ベルリン陶冶プログラム」の内容とその施設における実践化の過程に着目しながら、次のことを明らかにした。

改訂版でも、初版と同様に、陶冶・教育・養護の調和的な働きかけによって、子どもの人間形成が図られていた。しかも、ドイツでは、PISAショック以降、知的な教育が就学前施設において強まったが、日常的生活を重視したホリスティックなアプローチは変更されなかった。また、インクルーシブな教育が大切にされており、その基盤として、言葉やコミュニケーションの基礎的な教育の実践が熱心に取り組まれていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツの中でも移民の多いベルリン市においては、就学前施設としての幼児全日施設の教育改革は盛んに行われた。そこでは、障害をもつ子どもだけでなく、言葉や文化の違う移民の子どもを包含したインクルーシブな教育が尊重され、言葉やコミュニケーションの基礎的な体得が重視された。

グローバル化社会の進展の中で、移民の子どもを含めたインクルーシブ教育が当然のように現場で受けとめられ、その実践は、人間関係の形成という漠然としたものではなく、言葉やコミュニケーションという社会的なスキルの基礎を体得させ、人間の文化生活に親しませようとしている点で、従来からの保育に執着する日本の就学前教育に対する警鐘となる。

研究成果の概要（英文）： This study revealed following things about the characteristics of the current trend of moral education reform in early years centre in Berlin, focusing on the content of the revised "Berlin Education Program" and the practical process at the facility.

Human formation of the children by harmonious work of education, discipline and care was intended in the revised edition as well as in the first edition. Furthermore, while intellectual discipline was spread in preschool facilities after PISA shock in Germany, holistic approach, which puts emphasis on daily life was not changed. In addition, inclusive education was regarded as important, and practice of fundamental education of language and communication was worked on attentively.

研究分野：社会科学

キーワード：道德教育 ベルリン 就学前 幼児全日施設

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

これまで、応募者は自由ヴァルドルフ学校の実践やその基盤となる思想を中心に、道徳教育の理論と実践について研究してきた。その大きな意図は、小学校から「道徳の時間」に副読本を子どもに読ませて、道徳的価値を見つけさせるということを行ってきた日本の道徳教育に対して、根本的な改善を求めるものであった。

そこで、6年前からは、科研費の挑戦的萌芽研究として、「環境モラル」に着目しながら、社会科や理科や生活科だけでなく、「総合的な学習の時間」における道徳教育の可能性も探究してきた。そうした研究を通して、道徳教育のような人格教育を単に就学期以後に計画的に実施するのではなく、就学期以前から就学期以後を視野に入れて行うことがとりわけ重要であるという認識に至った。

ところが、就学前教育に当たる我が国の幼稚園や保育所の教育・保育の活動においては、健康や言葉などに比べて道徳性は明らかに軽視されている。その傍証の一つは、日本の幼稚園教育要領に今でも顕著に現れている。最も新しい幼稚園教育要領になってはじめて、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり」という「人格形成」の文言が新しく加えられたものの、幼児期における道徳教育に関しては、「道徳性の芽生えを培うに当たっては、・・・」と記されているだけである。

それとは対照的に、ドイツの首都ベルリンの幼児全日施設では、幼児期段階から異文化社会における「人格の発達」という目的が掲げられ、「ベルリン陶冶プログラム」に基づいて、すぐれた研究と実践が行われている。その「ベルリン陶冶プログラム」は、『OECD 保育白書』（2011年）でも「子どもの自律性および種々の集団内で責任をもち民主的に生活する能力を強めること」に注目されており、「人格の発達」を目指すベルリンの幼児教育の試みは、世界的にも高い評価を得つつあると言える。それゆえに、幼児期の段階から民主社会における「人格の発達」を視野に入れたベルリンの新しい試みを、2013(平成25)年度から3年間にわたって科研費(C)(25381069)を受け、「ベルリンの就学前施設における道徳教育の総合的研究」という課題名で研究した。その研究を行う中で、増加傾向にある発達障害の子どもや移民の子どもなどの、いわゆる学習困難児を含み込んだ中で多様化に応じたインクルーシブ教育、とりわけ多様化に応じたインクルーシブな道徳教育が喫緊の教育課題になってきていることに気づかされた。なぜなら、日々の習慣や宗教による価値観の相違に着目するならば、グローバル化社会における道徳教育は安易には画一的に行えないからである。その状況に、さらに難民がドイツに多く流入するようになり、よりいっそう困難な教育課題が首都ベルリンに降りかかろうとしている。

このような困難な教育状況がそのまま必ずしも日本の近未来に訪れるとは思われないが、それに近い事態は大いにあり得るために、一歩先に多様化・異文化の事態が進行しているドイツのベルリン市の姿を研究することは、日本の幼児期の道徳教育はもちろんのこと、就学後の道徳教育の有り様に対しても有益な示唆を与えられるという結論に達して、本研究を進めていきたいと考えようになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ベルリンの幼児全日施設(Kindertagesförderung)における道徳教育改革の今日的動向の特質について、2014年に10年の歳月をかけて改訂された「ベルリン陶冶プログラム」(Berliner Bildungsprogramm)の内容とその施設における実践化の過程に着目しながら解明するものである。より具体的に言えば、移民を含めた外国人の流入が問題となっているドイツのベルリン市において、異文化の子どもや発達障害の子どもを包含した幼児期のインクルーシブな道徳教育のあり方を、幼児全日施設の実践の中から探ろうとすることである。それによって、幼児期を道徳の芽生えとして見なし、人間としての基礎的・基本的な道徳教育を軽視していると思えない日本の就学前施設の現状に対して、さらには、新しい異文化共生時代にふさわしいインクルーシブでアクティブ・ラーニング的な道徳教育の内容と方法を構想しなければならない時代になっているにもかかわらず、およそ60年以上にわたる閉塞状況から相変わらず抜け出せないような小中学校の道徳教育の状況に対しても、抜本的な発想の転換を促すものである。

3. 研究の方法

上述した研究の目的を達成するために、以下の方法によって行われた。まず、我が国の幼児教育の状況を調査したうえで、2014年に改訂されて公になっている「ベルリン陶冶プログラム」を精緻に分析するとともに、ベルリン市においてインタビュー調査と資料収集を行い、分析検討を行った。

年次別には、次のように本研究を計画的に進めた。

まず、2016(平成28)年度に、我が国の研究と実践の現状とともに、道徳教育の先駆的な実践を行う幼児施設についても調査し、研究の視点を確立したうえで、ドイツ周辺国やドイツ国内の幼児教育の現地状況を調べながら、ベルリン市においてインタビュー調査と資料収集を行った。そこでは、公立の幼児全日施設の一つを訪問し、幼児教育・保育の実態を観察するとともに、女性の施設長(所長)と数時間にわたってインタビューを行い、さらにそこで働く男性保育者にもインタビューを行った。

次に、2017(平成 29)年度には、前年度の実績を踏まえて、文献研究と現地調査を継続して行った。文献研究については、改訂された「ベルリン陶冶プログラム」とともに、昨年度にベルリン市で収集した資料を詳細に検討した。また現地調査については、ドイツ、とりわけベルリン市に絞って実施した。訪問施設は、昨年と同じところで行った。また、ベルリン市全体の幼児全日制施設を管理する協会の責任者の一人にもインタビュー調査を行うとともに、幼児用に開発された教材を収集した。

また、2018(平成 30)年度には、この 2 年間の研究の中で収集したベルリンの研究資料、特に改訂された「ベルリン陶冶プログラム」に基づいて相次いで幼児用の教材が作成されたために、多くのものについては、研究期間を 1 年延長して行うことに決め、重要なもののみをこの年度の期間に取りあげて分析した。

研究期間を延長した 2019(令和元)年に、昨年度から積み残した資料を分析するとともに、これまでの研究成果を学会の課題テーマに沿う形で、道徳教育の国際学会で公表した。

4. 研究成果

本研究によって、ドイツの中でも移民の多いベルリン市においては、就学前施設としての幼児全日制施設の教育改革が盛んに行われていることを確認した。その教育改革の特徴は、初版(2004 年)の「ベルリン陶冶プログラム」と改訂版(2014 年)のその記述内容に顕著に示されていた。それに基づいて、具体的な教材の開発や子どもへの働きかけの工夫が実際に行われていたことを明らかにした。特に、障害をもつ子どもだけでなく、言葉や文化の違う移民の子どもを包含したようなインクルーシブな教育を尊重されていたことは、驚くべき発見であった。

というのは、ドイツでは、PISA ショック以降、知的な教育が就学前施設において強まっていたからである。事実、初版の「ベルリン陶冶プログラム」から、陶冶・教育・養護の調和的な働きかけの重要性は語られているものの、この三つの語句の中で、知的な教育に最も関係する陶冶を語句の先頭に置かれたこと自体が、就学前教育において知的な教育の重視を象徴するものであった。それにもかかわらず、グローバル化社会の進展の中で、移民の子どもを含めたインクルーシブ教育が当然のように現場で受けとめられ、言葉や文化の違う移民の子どもを包含したインクルーシブな教育が尊重され続けている実践を発見できたことは、大きな成果であった。また、そのような実践を具体的に実現化するための方策の一つが、言葉やコミュニケーションという社会的なスキルの基礎を施設の活動の中で体得させることであった。この点は、ドイツの就学前教育の基本的な特徴である生活基盤型を継承する実践であり、また人間関係の形成という漠然としたものに拘り、それに加えて発達の視点から区別された 5 領域の内容に固守している我が国の就学前教育に対して、重大な警鐘を鳴らすと同時に、発想の転換を促すものであることを確認できた。

より具体的に成果を示すと、年次別には次のようになる。

2016(平成 28)年度には、初版(2004 年)の「ベルリン陶冶プログラム」と改訂版(2014 年)のその記述内容において大きく変更された点を整理した。基本的には根本的な変更はなかったが、それでも比較的大きな変更をあげるとすれば、それは教育のコンセプトの中心を示していた構造図の変更であり、次の三点である。一つは、初版では七つの図が示されていたが、「基礎学校への移行」の図が削除され、六つの図で構成されていた。二つ目は、構造図の中心に置かれていた「陶冶領域」の図が右上に移動され、基礎的で中心的な位置に、「陶理解解：教育者側からの課題」として右上にあったものが、「教育的・方法的課題」という名称に変更されて据えられていた。その際に、「教育的・方法的課題」図の中に、具体的な内容項目が追加され、その中の一つに「障害をもった子どもとのインテグレーション」が含まれていた。三つ目としては、人格の発達を促す四つのコンピテンシーは、そのままの位置に置かれていたが、「陶理解解」という語句は削除されている。この三つの変更は、次の二つの点を考慮したものであると解釈できる。一つは、「陶冶」という語句を削除するだけでなく、中心から端に移動させていることから、改訂版の新しい構造図は知育への偏りの警戒感を示していると解釈できる。また、基礎的で中心的な位置に置かれた「教育的・方法的課題」の図の中に、「障害をもった子どもとのインテグレーション」という内容項目を新たに追加したことから、インクルーシブ教育の重要性は、より強い響きのあるインテグレーションという語句で示していると解釈できる。このように読み解いた成果については、2017(平成 29)年 3 月に発行された学術誌に公表した。

2017(平成 29)年度には、改訂された「ベルリン陶冶プログラム」のすべてを詳細に分析した。その作業から、特に重要な部分については語句に対して忠実に翻訳したうえで、そこから読み取れる新しい改革の方向性を確認した。その成果については、2018(平成 30)年 3 月に発行された学術誌に公表した。

2017(平成 29)年度には、改訂された「ベルリン陶冶プログラム」の中の「言葉(Sprach)」に着目したうえで、それに基づいて作成された教材とその手引書を総合的に分析するとともに、この点に関連することについての我が国への示唆を中心に検討した。その検討によって、それらの資料のすべてにおいて、「言葉」は社会生活を営むために、コミュニケーションのツールとして重要視されていた。しかも、人間的な諸能力の発達の精緻な学問的指標を活用しながら、子どもの生活や活動の中で「言葉」のスキル、ひいてはコミュニケーションのスキルを育むように工夫している点は、我が国の就学前教育の改善に向けて大いに参考になるであろう。特に、我が国の「言葉」の指導は、生活上の実用性をあまり重要視することなく、過度に相手や自分

の心を押し量るような、内向きで、しかも情緒的・心情的なものに偏り過ぎていることに気づかされた。その大きな要因の一つとして考えられるのは、もちろん現代社会における心理主義化の傾向であるが、その通路になっているのが、5 領域の中に「言葉」とともに組み込まれている「人間関係」という領域の存在ではないか。なぜなら、本研究で取り扱った初版や改訂版の「ベルリン陶冶プログラム」においても、またそれに基づいた資料を探してみても、そもそも「人間関係」という領域も存在しないうえに、そのようなタイトルも、筆者の管見する限り、ほとんど見当たらないことが判明した。つまり、日本において「人間関係」として扱われる内容は、ドイツにおいてコミュニケーションや社会生活という領域でかなり吸収されているということを確認できた。

2017(平成 29)年度には、ドイツにおいて入手した資料を整理するとともに、これまでの研究成果を踏まえて、日本との対比においてベルリン市の就学前教育の特徴について、世界的にも権威のある道徳教育学会(Association for Moral Education)の第 45 回年次大会(2019 年 11 月 7 日～9 日、シアトル)という国際学会の場で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉田武男、田中怜	4. 巻 20
2. 論文標題 『ベルリン陶冶プログラム(改訂版)』について (2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 筑波大学道德教育研究	6. 最初と最後の頁 67-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田武男、平岡秀美	4. 巻 19
2. 論文標題 『ベルリン陶冶プログラム(改訂版)』について(1)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 筑波大学道德教育研究	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田武男	4. 巻 18
2. 論文標題 『ベルリン陶冶プログラム』の動向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 筑波大学道德教育研究	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takeo YOSHIDA, Wakana KAWAKAMI, Kei MIYAMOTO
2. 発表標題 A comparative study preschool of education in Japan and Germany
3. 学会等名 45TH ANNUAL AME CONFERENCE 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----